

P10-206

N病院の現状にあった転倒転落アセスメントスコアシート

長野赤十字病院 看護部

○田中 真理子、竹内 修子、宮本 真澄

【はじめに】N病院は転倒転落アセスメントスコアシート(以下スコアシート)を運用して6年になる。これまでスコアシートがマニュアル通りに記載されているかの評価は行ってきたが、スコアシートの内容そのものについての評価、見直しはされてこなかった。また、スタッフからは「現状に即したスコアシートになっていない」「スコアシートの点数配分に妥当性がない」などの意見が聞かれた。そこで、現行のスコアシートの問題点を明らかにし、N病院に即した新スコアシートの作成を試みたのでその経過を報告する。

【研究目的】1. 現行のスコアシートの問題点を明らかにする。
2. 転倒転落事例からN病院の危険因子の傾向を明らかにする。
3. 1、2よりN病院に即した新スコアシートを作成する。

【研究方法】1. 現行のスコアシートの記載上の問題点についてアンケート調査した。

2. 記載者によってスコアシートの記載に差がでるか調査して、不一致率を抽出した。

3. N病院の危険因子の傾向を知るために、転倒転落したインシデントレポート症例の事故発生時の詳細をカルテより情報収集し、記載済みのスコアシートに追加した。これを集計し主成分分析による危険因子を抽出した。

4. 新スコアシートを作成した。

【結果】1. 記載者による不一致率が高い項目は3つあった。これは、記載者の判断の違いによりスコアシートの点数に差が生じていたためであり、記載者による差が出ないように記載基準を設けた。

2. アンケートの結果より、スコアシートの記載上の問題点は様式に関するものと危険因子の項目に関するものが中心であった。

3. 文献や抽出された危険因子の項目をもとに、再度危険因子の項目と点数配分についても検討した。

4. 以上の3点より、様式も見直し新スコアシートを作成することができた。

P10-208

T病院外来化学療法患者における抑うつの評価

徳島赤十字病院 看護部

○中岡 京子、宮生 仁美、八木 久仁子、武市 文恵、高芝 朋子、藤河 周作

【目的】T病院の外来化学療法導入患者と1~3年間化学療法を継続している患者の抑うつ状態を明らかにする。

【方法】対象：研究に同意を得られた患者98名

期間：2009年9月15日~12月15日

方法：CES-D Scale

【うつ病(抑うつ状態)／自己評価尺度】を使用し調査し、SPSSを用いて集計、分析した。外来化学療法導入時の患者を導入群、1~3年間継続している患者を継続群とし2元配置の分散分析により比較検討した。

【結果・考察】1. 調査した患者98名中、抑うつ該当者は28名(28.6%)であり、がん患者のうつ病有病率と一致していた。

2. 1ヶ月毎3回継続してCES-D調査をした患者25名のうち導入群は11名、継続群は14名であった。導入群の抑うつ該当者は1回目4名、2回目2名、3回目0名と減少し、CES-D得点の平均値の低下に有意差が認められた($p < 0.05$)。これは、治療体験を重ねることやチームアプローチの効果により減少したと考える。今後、導入前のオリエンテーションを強化させるとともに、化学療法の副作用を最小限に抑えるためにチームアプローチをさらに充実させる必要があると考える。継続群の抑うつ該当者は、1回目3名、2回目4名、3回目4名で人数の変化はなく、CES-D得点の平均値は11~12点と高いまま推移していた。これはがんと共生の時期にあっても、再発や転移による治療の変更や日常生活上のエピソードなどのイベントにより心理状態が変化し高い値となっていると考える。

【結語】1. 抑うつ状態に該当する患者は28.6%であった。

2. 抑うつ状態の変化については、導入群ではCES-D得点に有意な低下が認められた($p < 0.05$)。継続群では低下が認められず、高いまま推移していた。

P10-207

化学療法における投与方法の見直し

小川赤十字病院 看護部

○伊得 和枝、飯塚 知代、田中 純子

【はじめに】当院では、平成20年4月より外来化学療法室が開設された。平成21年の本学会にて1年経過後に明らかにされた問題と課題を報告したが、その内容は看護師の抗がん剤治療(以下化療とす)に対する意識の低いことであった。今回、赤十字医療施設東部ブロック「がん化学療法学習会」に参加し抗がん剤の取り扱いに関する研修を受けたことをきっかけに、スタッフにアンケート調査を行い、手順書の作成を行ったのでここに報告する。

【方法】看護師スタッフを対象に、(はい・いいえ)の2択回答を主に、化療準備~開始時~終了時の場面ごとのアンケート調査を行った。

【結果・考察】化療件数が月に10件未満の病棟は、化療件数が月に20件ほどある病棟に比べ2~46%安全性や曝露に対して認識の低い結果が出た。また全体的に、曝露予防に必要な「マスク・手袋・エプロンの3点セットの着用率」は27%と低く「着用していない」と答えた60%のうち、「マスク・手袋を単独でそれぞれ使用する」と答えたものは78%であった。しかし「何も着用せず」としたものは16%おり「ラテックス手袋の着用率」も31%であった。「健康被害が医療従事者にあること」を73%の人が知っていること答えたが、具体的に自分をどう守るかは、意識の薄いことがわかった。この結果を踏まえ、看護師が業務の中で知らず知らずに曝露を受けている可能性が伺えるため、注意事項を明記した手順書を作成した。同時に、観察・確認ポイントとして、全身状態の指標となるPSの分類や、血管外漏出時の組織浸潤に基づく分類を表にし、記載した。

【まとめ】アンケート調査にて現状を把握した後に手順書を作成した。今後は、手順書を活用し化療に対する認識を改め抗がん剤の曝露などを予防し、安全に取り組めるよう更に検討していきたい。

P10-209

看護師の看取りの経験からの学びに関する実態調査

仙台赤十字病院 看護部

○菅原 祥子、鈴木 由美

【はじめに】本研究では看護師が終末期の看取りの経験から何を学んでいるかについて調査を行なった。

【目的】病棟看護師が看取りの経験から何を学んでいるかを明らかにし、終末期看護の充実を図る手がかりとする。

【研究方法】対象：A病院内科病棟看護師2名、研究期間：平成21年8月~11月、データ収集方法：半構成的面接法、データ分析方法：データを逐語録にしカテゴリー化、倫理的配慮：研究の趣旨・配慮事項について説明し、同意書への署名にて同意の確認

【結果および考察】患者や家族のためにケアをしたいと思っても、勤務時間や患者の身体・精神的状態、家族の意向によってできないことがある状況の中で葛藤が生じており「看護師として患者・家族への対応に限界を感じる」思いになった。業務の煩雑さや医療チーム間でのコミュニケーション不足による「患者・家族・医療チームの共通理解不足を感じる」ことや「医療チームの情報共有不足を感じる」ことになり、終末期看護に携わる看護師の葛藤を生じていた。

良い看取りの経験は、患者・家族と信頼関係を構築でき、欲求や要望に誠心誠意向き合うことができたことから「看護師が患者・家族の心の支えになる」ことを実感しており、QOLの向上に努めていた。患者・家族が終末期に否定と受容を繰り返しながらも病気や死と向き合い、悔いを残さないような時間を過ごす場面に関わったことや、臨終時に家族に囲まれて死を迎えられるように配慮できたことから「患者・家族・医療チームが納得できる看取りに関わる」ことが良い看取りとして語られた。看護師は看取りを経験し「看護師として成長できたと感じる」思いになっていた。

【結論】看取りを経験した看護師は、終末期看護に対する葛藤を抱きながらも満足感を得ており、その経験が自身の学びを深めることにつながっていた。